

LIBRARY

鳥取大学附属図書館報

136

Sept. / 2021



INDEX

- 01 **巻頭言**
鳥取砂丘発の乾燥地研究、そしてSDGsへ
山中典和
- 03 **私の選んだこの一冊**
『私とは何か：「個人」から「分人」へ』
中尾雅之
『論語と算盤：現代語訳』
木原奈穂子
- 07 鳥取県立図書館相互派遣研修について
- 08 **トピックス**
AVブースのご紹介
自動貸出返却装置の増設
附属図書館の新型コロナウイルス
感染症対応について
中央図書館配架の国内発行雑誌アンケート結果
電子書籍のご紹介

鳥取砂丘発の乾燥地研究、そしてSDGsへ



山中 典和 (やまなか のりかず)
乾燥地研究センター長、教授

鳥取大学の個性、強みの一つに乾燥地研究があります。現在では乾燥地研究センターや、全学組織の国際乾燥地研究教育機構が中心になり、全学的な乾燥地研究や乾燥地に関わる教育が進められています。ではなぜ鳥取大学で乾燥地研究が盛んになってきたのでしょうか？ 背景には鳥取砂丘の存在があります。乾燥地研究の中核を担ってきた乾燥地研究センターは、今から約30年前の1990年6月8日、農学部附属砂丘利用研究施設の改組により、全国共同利用施設としてスタートしました。私たちが現在行っている乾燥地研究の源流は鳥取砂丘を舞台とした砂丘研究にあり、その歴史は鳥取高等農業学校が設立されて間もない1923年頃まで遡ることができます。現在でこそ、鳥取

砂丘は鳥取の観光の目玉として毎年多くの観光客が訪れていますが、1920年代の鳥取砂丘は現在とは異なる多くの課題を抱えていました。当時、広大な砂丘地は、風が吹くと砂が移動し、家屋や道路に飛砂害が生じ、作物が育たない不毛の地とみなされていました。この砂丘地の農業利用が当時の大きな課題であったのです。

鳥取の砂丘地で農業を行うためには、まず飛砂問題を解決する必要がありました。砂の移動を止め、砂丘地に植林を行うための技術開発が最初の課題であり、研究を牽引したのが原勝教授です。原教授は砂丘の自然環境と砂丘固定に関わる実践的な現場研究を行うとともに、徹底した文献調査を行っています。今でこそインターネットの普及により地方でのハンディは少なくなりましたが、当時の状況では海外文献を含めた文献調査は大変な努力が必要だったことと思います。砂丘の研究に没頭した原教授は、やがて「原方式」と呼ばれる砂丘固定・砂丘造林技術を確立し、それが全国に広まってゆきました。

飛砂対策の次の課題は、砂丘地での農業利用です。それには灌漑技術開発、そして砂丘地に適した作物開発が重要です。砂丘での農業研究の中心に立っていたのが、園芸学研究室の遠山正瑛教授です。



乾燥地研究センターに残る原勝先生（左）と遠山正瑛先生（右）の碑。原先生の碑には「砂丘はわが心の友 原勝」と刻まれている。

遠山教授は、後に中国での乾燥地緑化における功績により、アジアのノーベル賞と呼ばれるマグサイサイ賞を受賞されますが、当時は原教授らとともに、砂丘地の農業利用研究を推し進めました。1958年には農学部附属として砂丘利用研究施設が設置され、砂丘農業に向けた研究が本格化します。大きな課題は砂地での灌漑でした。鳥取では“嫁殺し”という言葉が残っていますが、農家ではお嫁さんも含め、まさに家族総出で、木桶に水を入れ、肩に担いで水をやり続けなければいけない現実がありました。この改善のために様々な灌漑技術研究が行われました。重要な成果は国内初のスプリンクラー灌漑試験が行われたことです。国産第一号となるスプリンクラーも鳥取で開発されて全国に広まってゆきました。さらに、砂丘地に適する作物開発も進められ、現在の鳥取砂丘での農業を代表するラッキョウやナガイモを始めとする多くの作物の栽培試験が行われました。

このように、鳥取砂丘を舞台にした砂丘研究が1970年代ごろまで盛んに行われてきましたが、砂丘地での農業生産が安定してくるのに伴い、鳥取砂丘で得られた成果や経験をもとに、乾燥地での研究が始まりました。当時、中国やイランなどを手始めとして乾燥地緑化や、乾燥地農業の研究が進められました。この流れを受けて、1990年に砂丘利用研究施設から乾燥地研究センターへの改組が行われます。このターニングポイントでの大きな出来事として、乾燥地研究センターが全国共同利用施設となったことが挙げられます。これにより、乾燥地研究センターと全国の乾燥地研究者が共同研究として乾燥地研究を行う、現在の体制が確立したのです。

現在の乾燥地研究センターは、乾燥地問題に組織的に取り組む、我が国唯一の研究機関として、乾燥地

が有する様々な課題、特に砂漠化問題、乾燥地での農業問題、そして黄砂問題などに取り組んでいます。

近年では、国連が提唱する持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals :SDGs)の認知度が高まってきましたが、乾燥地研究センターが進めている乾燥地での農業研究はまさに、SDG1「貧困をなくそう」やSDG2「飢餓を0に」に相当するものですし、砂漠化研究や黄砂研究はSDG15「緑の豊かさを守ろう」に相当します。さらに砂漠化研究や乾燥地農業研究、そして黄砂研究全体に関わってくるものとして気候変動があります。気候変動に関わる研究はまさにSDG13「気候変動に具体的な対策を」に相当します。

このように鳥取砂丘から始まった砂丘研究はやがて乾燥地研究センターの乾燥地農業、乾燥地緑化研究へと発展し、現在では国際乾燥地研究教育機構という全学組織も整備され、鳥取大学の大きな特色・強みとなっています。鳥取大学全体としても取り組むSDGsの中心にある「持続可能性」という言葉は私たちの未来を考える重要なキーワードです。「誰一人取り残さない、持続可能でより良い世界」を実現させるため、皆さんも身の回りの話題から、国際的な課題まで含め、SDGsという観点からの取り組みを進めていただきたいと思います。

参考図書



『乾燥地を救う知恵と技術：砂漠化・土地劣化・干ばつ問題への対処法』
恒川篤史編集代表
丸善出版, 2014

中央図書館 教員著作
454.64:Kan

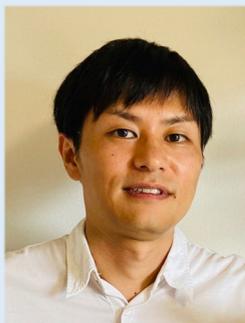


『鳥取砂丘学』
小玉芳敬, 永松大, 高田健一編
古今書院, 2017

中央図書館 教員著作
454.64:Tot

『私とは何か：「個人」から「分人」へ

/ 平野啓一郎著』



中尾 雅之（なかお まさゆき）
地域学部 准教授

先日、ある学生(Aさん)が授業に関する質問をするために、私の研究室にやって来ました。Aさんは、質問が終わっても、なかなか帰ろうとしません。「どうしたの?」と聞くと、Aさんは、少し思いつめたような顔で言いました。

「先生、大学って何をするといいんでしょうか?」

Aさんは、入学以来、ずっとオンライン中心の授業を受けてきました。そしてほとんどの時間を家で、一人で、過ごしてきました。

「今、自分が大学生であるという実感を持つことができません。日々、オンライン授業を聞き、山のように積み重なる課題を一つひとつこなしてきました。でも、なんか、そのお、自分は今いったい何をしているのかよく分かりません。このままでは、大学で自分探しの旅をすることができないというかー本当の自分を探ることができないように思えてー」

私は、大学に務めるようになってから、「自分探し」・「本当の自分」というフレーズをよく聞くようになりました。

「海外に出て自分探しの旅がしたいです!」

「自分探しの旅に出て、本当の自分に出会いたいです!」

こういった声を聞いているうちに、この「自分探し」というフレーズに少しずつ違和感を感じるようになりました。かくいう私自身も、以前は「自分探し」というフレーズを何気なく使っていたように思います。

よくよく考えてみると、「自分探し」、つまり「自分を探す」とはどういうことなのでしょう。「自分探し」というフレーズに主語を補えば、「自分が自分を探す」という文が出来上がります。ここで注意してもらいたいのは、主語と目的語に「自分」が2回出てくることです。私が出会った学生のほとんどは、この目的語の「自分」の部分に、「理想の自分」「本当の自分」などを想定していたのではないかと思います。では、主語の「自分」、つまり「自分探し」において「自分」を探している「自分」とはいったい誰なのでしょう。

本当の自分ではない自分?

現状に満足していない自分?

一方は本当の自分で、他方は本当の自分ではないーいったいどういうこと? 自分探していうけど、今、すぐそこに、自分がいるじゃないか。その自分を無視して、「本当の自分」を探していったいどういうこと? このようなことを考えていると、頭が混乱してきます。



さて、前置きが長くなりましたが、今回私が紹介したい本は、小説家平野啓一郎さんの『私とは何か―「個人」から「分人」へ』という本です。この本では、個人のアイデンティティの複数性・多様性を認識することの重要性が述べられています。

平野さんは、アイデンティティの複数性を認識しやすくするために「分人」という単位を導入します。分人とは、個人よりも小さな単位で、対人関係ごとに構築される一つひとつの「自分」のことを指しています。例えば、家族といるときの自分、友達といる時の自分、先生といる時の自分などです。平野さんは、これら一つひとつの自分を、異なる分人として捉えます。個人というものは、複数の分人から構成されており、その分人の構成比率が個人の個性(のようなもの)になる。そのように平野さんは考えます。

ここで重要なことは、それぞれの分人は、全て本当の自分であるということです。分人と似たような表現に「キャラ」があります。しかし分人とキャラは似て非なるものだと平野さんは言います。キャラは、「キャラを被る」という表現からも分かるように、キャラという「偽物」の仮面の下に「本当」の自分なるものが想定されているからです。しかも、この場合、複数のキャラ(仮面)の下に「一つの固定された自分(本当の自分なるもの)」が想定されているように思います。

コロナ禍2年目。現在も先行きの見えない厳しい状況が続いています。このような不安定な状況の中で、「確固たる、一つの、本当の自分」を探したくなる気持ちはよく分かります。そうでないと、自分のアイデンティティがぐらついてしまうからです。

多様性の時代において、自分と他者との違いを認めることは大切なことです。その一方で、自分の中にある多様性に目を向けて生きていくことも同じくらい重要であると思います。いわゆる「自分探し」というフレーズに私が違和感を覚えるのは、自分探しをしようとする本人が、これまでの経験を通して構築されてきた複数の分人の存在を見て見ぬふりをしているように感じるからです。もう少し強い言い方をすれば、自分の中にある複数性・多様性を否定しているように見えるといってもいいかもしれません。

平野さんの本を読めば、自分探しという行為を二つの意味で捉えることができます。一つは、新たな出

会い・経験を通して新しい分人を構築すること。もう一つは、現在の自分の中にある複数の分人を認識することです。

あらゆる活動が制限されているコロナ禍において、新たな分人を構築することは難しいかもしれません。しかし見方を変えれば、このような状況は、「自分探しをしようとしている自分」とは何者なのかを考える良い機会になるかもしれません。

自分の中にある多様性を認識する「旅」は、楽しいとは限りません。嫌いな自分(分人)ばかり見えてきて、自己否定のスパイラルに陥ってしまう可能性があります。平野さんは、全ての分人を好きになる必要はないと言います。好きな分人が一つか二つあれば、それを足がかりにして、生きていけばいいと。

過去を振り返ってみて、好きな分人が一つでも見つければ、少し落ち着きます。気が楽になります。自己肯定感が増します。現在の自分を無視(否定)しつつ、無理をして、いわゆる自分探しの旅に出ようと思わなくなるかもしれません。

先日出会ったAさんが、何を思いながら「自分探しの旅」「本当の自分」といったフレーズを使ったのかは分かりませんが、外出制限がかかるコロナ禍においても、読書という対話を通じて、新たな分人を構築することは可能です。学生のみなさんには、ぜひこの機会にたくさんの本を読んでいただければと思います。手始めにこの本を読んでみてはいかがでしょうか。



『私とは何か : 「個人」から「分人」へ』
平野啓一郎著 講談社, 2012.9

中央図書館 新書・文庫コーナー
新書:KG:2172

『論語と算盤：現代語訳』

／ 渋沢栄一著， 守屋淳訳』



木原 奈穂子 (きはら なほこ)
農学部 講師

毎日あくせく働いてお金を手にし、自分のしたいことに消費して、頻繁に貯金の残高とにらめっこする。欲しいものはたくさん思い浮かぶのに、それを叶えるだけのお金は簡単には手に入らず、なんだか無性にさみしい気持ちになるときがある。アルバイト先の社員の人たちは自分たちよりお金をもらってるはずなのに、時給の安い自分たちばかりが仕事をしているような気がする。お金持ちの家の子がうらやましい。成功している人がどれだけ稼いでいるのか、テレビやニュースで取り上げられると、限られた人にだけお金が集まっているような気がして、不公平だと感じる。誰かが不幸になっても、簡単にお金を稼げるなら、幸せになる人もいるんだから、仕方ないじゃないんじゃないか？

誰しも一度くらいはこんな考えを抱いたことがあるのではないかと思います。もちろん私も、少なくとも一度以上は考えたことがあります。このような考えや、お金にまつ



わる思惑を持つということは、経済活動に参加している証拠だと思います。しかし、そもそも経済はお金の流れだけで捉えて良いものなのか、豊かさはお金でしか測れないのかどうかと、考え込んでしまいます。

大河ドラマでも取り上げられ、あらゆるところで「渋沢栄一」の名を見かけるようになりましたが、彼の考え方に、上記のような悩み(や愚痴)の一つのヒントがありそうです。渋沢栄一の名著と言われる本書「論語と算盤」は、堅苦しい理論が並ぶ、小難しい理論書ではありません。渋沢は、「論語＝道徳」と「算盤＝利益・お金」とを切り離してはいけない、それら二つを両輪とすることで経済が発展する、という事業家としての考え方を、当時、多くの企業家・起業家に向けて語り続けていたそうです。本書は、そのような講談内容などを基にまとめられた『談話集』の構成をしています。かつ、誰もが読みやすいよう、現代語に翻訳されています。(さらに理解を深めるには、時代背景を勉強することをおすすめします。)

新時代の幕開けを迎えた明治初期、現在の日本の経済システムの端緒となった時代に、経済はどうあるべきかを、本書は語り掛けます。その内容は、志の立て方から権利の考え方、人格の磨き方から教育のあり方など、多岐にわたりますが、その語りの中心には常に論語があり、「経済を担う人はどうあるべきか」を説いています。つまり、人を育てることが経済の発展につながること、また経済が発展した結果、得た利益を人が育つ環境の整備につなげること、そういった考えを持つ事業家を多く生み出すことで、お金の流れだけにとらわれない経済のあり方を伝道していた(現代においても伝道している)のだと思います。本書を読み進めると、渋沢の使命感を肌を感じながらも、自らの経験を踏まえながら雄弁に語るさまがありありと思い浮かびます。このため現代にお

いても多くの人に読まれる名著となっているのだと思います。

例えば「現実と学問との調和」という言葉が本文中に出てくるのですが、この言葉は今でも私の心に刺さります。学問(＝理論)ばかりして頭でっかちになってないか、現実ばかりに執着して理論的に考えることを疎かにしていないか、身につまされる言葉です。また、社会全体に視野を広げれば、どちらか一方だけでは文明社会にはなり得ない、と渋沢は指摘しています。本書を読んでいると、渋沢に語り掛けられ、励まされているような(時に叱られているような)心持ちになるのも、読書上での楽しい点の一つかもしれません。

「経済」という言葉は、中国古典にある「世をおさめ民を救う」という意味の「経世済民」から取られたと言われています。つまり経済活動には、社会を良くすると同時に、私たちの生活も健やかなものにする意義が込められています。このような「経済」の元来の意味を押さえた上で本書を読むと、「経済」へのイメージが少し変わるかもしれません。現代日本の経済システムの構築を担い、「経世済民」を分かりやすく実現しようとしてきた歴史上の偉人として渋沢栄一の言葉に、ぜひ目を、耳を傾けて見てください。また、そういった言葉から学ぶだけではなく、ぜひ生活の中で、渋沢栄一の軌跡をたどってみたいと思います。

『論語と算盤：現代語訳』
渋沢栄一著、守屋淳訳
筑摩書房、2010.2

中央図書館 開架 335.13:Ron



鳥取県立図書館相互派遣研修について

鳥取大学附属図書館と鳥取県立図書館の間で行われた相互派遣研修により、2021年3月初旬の3日間を鳥取県立図書館で過ごさせていただきました。同じ鳥取県内の図書館とはいえ、提供しているサービスや利用者層など両館には様々な違いがあります。鳥取県立図書館にはどんな“図書館の仕事”があるのだろうと、ワクワクする気持ちで研修を迎えました。

実際の研修では、たとえば開館業務一つとっても、鳥取大学附属図書館での作業と同じこと（ブックポストからの資料の回収と返却処理、電子掲示板や蔵書検索用パソコンの電源を入れるなど）も、違うこと（開館前に除架[古い資料を開架の棚から取り除き、閉架に移す作業]を行う、ブックポストに返却されていた資料は処理日に返却されたものとする）もあり、一つ一つが新鮮に感じられました。特に違いについては、どうしてそうなっているのだろう、参考にできる点はないだろうかと考えたり、研修を担当してくださった方に直接訊ねたりするよう心掛けました。

（たとえば閉館時間中にブックポストに返却された資料について、鳥取大学附属図書館では前開館日に返却されたものとして処理しますが、鳥取県立図書館では当日に返却されたものとして処理していました。前者では延滞日数に合わせて貸出停止の罰則がつくため正確な返却日の管理が必要ですが、後者ではそうした罰則が必ずしも付くわけではない、という理由によるようです）

また研修中しばしば意識することになったのが、

鳥取県立図書館で働いている方たちは、普段から一緒に働いている仲間だということです。たとえば、自分が従事している業務には、自館所蔵のない資料を外部から手配するというものがあり、鳥取県立図書館から資料をお借りすることもあります。今回の研修では、鳥取県立図書館の側から資料を送りだしたり受け取ったりという作業を見学させていただきました。これまで見えていなかった“向こう側”の様子を知ることで、お互いに気持ちよく仕事をするためにこれからどうすればいいだろうと考えたことが今も印象に残っており、またこの先も忘れず心がけていきたいと思っています。

最後に、この研修をきっかけとして、環日本海交流室コーナー（中央図書館1F 新聞コーナー向かい）の見直しを行っています。このコーナーの資料はすべて鳥取県立図書館内にある環日本海交流室からお借りしており、中国・韓国・ロシアに関する100冊の資料を3ヶ月ごとに入れ替えながら、学内者へ貸出を行っています。このコーナーの貸出冊数の少なさが以前から気になってはいたのですが、研修を通して環日本海交流室



中央図書館で行っている環日本海交流室資料の展示

の所蔵資料を知り、担当の方と言葉を交わすなかで、あらためて貸出冊数増加を目指す気持ちが高まりました。鳥取県立図書館側の担当者に相談して資料の構成を変えていただいたり、資料の入れ替えにあわせて展示を行ったりするなど、

魅力的なコーナー作りと知名度向上を目指して取り組んでいます。

杉田 佳凜（すぎた かりん）
研究推進部図書館情報課

トピックス

AV（視聴覚資料）ブースのご紹介

中央図書館のAVブースを2021年3月にリニューアルしました。以前は1階集密書架前に設置されていましたが、リニューアル後はラーニング commons の奥へ移設し、ブースも増設されて3つとなりました。集中してご利用いただけるように他スペースと仕切りを設けています。ご利用の際はカウンターまでお越しください。

- 利用時間：9:00～閉館20分前
（申込受付は閉館30分前まで）
- 利用対象：図書館所蔵の視聴覚資料に限ります



自動貸出返却装置の増設



図書自動貸出・返却装置を中央図書館カウンター前に新しく1台設置しました。

これで以前から設置されている装置とあわせて2台設置されることとなります。以前から設置されているものが3M、新しく設置されたものがIDECとメーカーは異なりますが、どちらも貸出、返却、延長等同様の手順で手続きができます。皆様のご都合にあわせてご利用ください。また、ピーク時の混雑が緩和されること等も期待されています。

附属図書館の新型コロナウイルス感染症対応について

3月	中央図書館の自動貸出返却装置を増設
4月	中央図書館の夜間開館等を一部再開(8日) 医学図書館の夜間開館等を一部再開(19日) 医学図書館の平日夜間開館等を20時まで再開(19日) レポートの書き方講習会、図書館入門ツアー等オンラインコンテンツの作成、公開(14日) 中央図書館の第一閲覧室の座席パーティションを設置
5月	中央図書館の平日夜間開館等を23時まで再開(6日) 中央図書館学生選書会をオンラインで実施(おうちでお気楽プチ選書)
6月	医学図書館の平日夜間開館を23時まで再開(2日) 中央図書館第三、四閲覧室の一部座席にパーティションを増設(17日)

中央図書館配架の国内発行雑誌アンケート結果

2020年度に中央図書館配架の国内発行雑誌の見直しを検討し、購読雑誌の利用状況を確認するためにアンケートを実施いたしました。この結果を踏まえて、今年度より新規に右記タイトルをご利用いただけるよう配架しています。

アンケートをいただいた学生、教職員のみなさまには改めて感謝申し上げます。貴重なご意見、ご回答をお寄せいただきありがとうございます。ありがとうございました。

ご来館の際はぜひご利用ください。

- A+U / エー・アンド・ユー
- 現代思想 / 青土社
- 判例地方自治 / ぎょうせい
- 一橋ビジネスレビュー / 東洋経済新報社
- 法律時報 / 日本評論社
- 情報処理 / 情報処理学会
- 民藝 / 日本民藝協会
- 新建築.住宅特集 / 新建築社
- 時の法令 / 朝陽会
- トランジスタ技術(ジュニア版含) / CQ出版



4月号 49巻4号～



4月号 470号～



68巻4号～



4月号 93巻4号～



4月号 62巻4号～



2021年4月通巻820号～



4月号 420号～



2119号～



58巻4号～

トピックス

電子書籍（KinoDen、岩波書店「現代人の教養」）のご紹介

• KinoDen (Kinokuniya Digital Library)

紀伊國屋書店がプラットフォームを提供している、日本語を中心とした電子書籍になります。そのうちTOEIC対策資料等を中心にプレゼンテーション、レポートの書き方などをご利用いただけるようにしています。OPACまたは提供サイトより検索ができます。また、TOEICの点数ごとに本学で利用できる資料をまとめた対策パンフレット(600点編 / 700点超編 / 900点編)も作成しています。

KinoDen トップページ
<https://kinoden.kinokuniya.co.jp/totori-u/>



- はじめてのTOEIC 目指せ600点編
- 目指せ700点超編
- 目指せ900点編



• 岩波書店「現代人の教養」

岩波書店の文庫、新書等は人気が高く、利用の多いシリーズのため「現代人の教養」をテーマにした電子書籍500タイトルをご利用いただけるようになりました。スマートフォン、タブレット端末等でも閲覧しやすく、音声読み上げにも対応していますので、手がふさがっているときでも利用可能です。ただし印刷、ダウンロードはできません。こちらもOPACまたは提供サイト(MeL: Maruzen eBook Library)からも検索、ご利用をいただけます。

岩波書店「現代人の教養」
<https://elib.maruzen.co.jp/elib/html/SeriesDetail/Id/3000074330>





編集・発行

鳥取大学附属図書館

〒680-8554 鳥取市湖山町南4丁目101番地

 <http://www.lib.tottori-u.ac.jp/index.html>

 <https://www.facebook.com/TottoriUnivLib/>

 https://twitter.com/TottoriU_Lib